

常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内 発掘調査現地公開資料

2008年5月31日(土)

調査地：京都市右京区太秦一ノ井町・太秦東蜂岡町

調査機関：2008年4月11日～継続中

調査面積：約1,300㎡

調査主体：財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

この調査は、JR山陰線(嵯峨野線)の複線化高架工事に伴う発掘調査です。幅3m長さ470mにわたる細長い調査区です。2006年には南側の高架工事に伴う発掘調査を実施しており、今回はその北側にあたります。前回は弥生時代中期・古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の溝・鎌倉時代の土坑墓・室町時代の火葬墓などが検出されています。また北側に隣接した1977年の調査では、古墳時代後期の竪穴住居跡が24棟、鎌倉時代から近世にかけての土坑墓群が多数見つかっています。

調査の概要

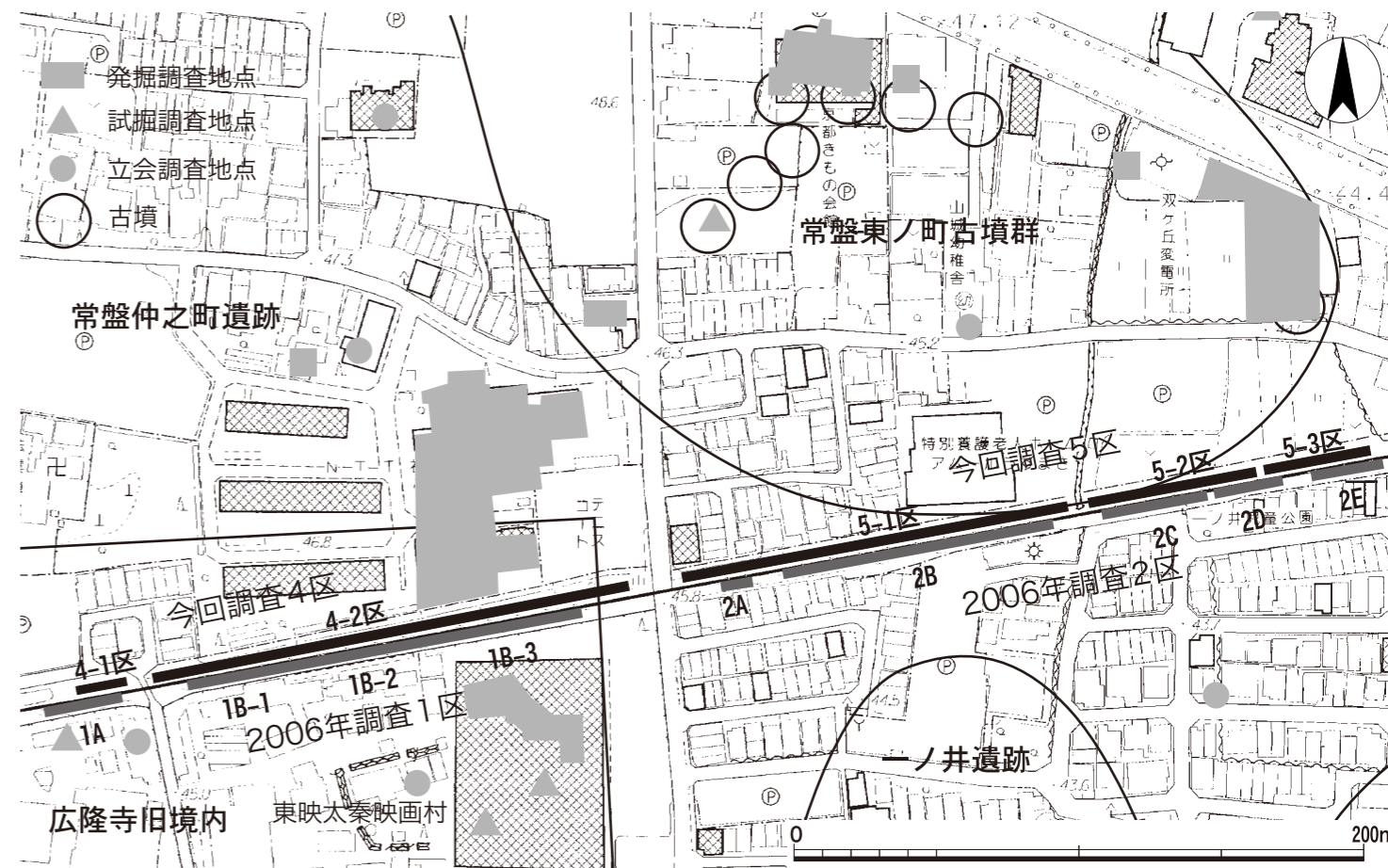
調査地は古墳時代の集落跡で知られている常盤仲之町遺跡と飛鳥時代建立の広隆寺旧境内に重複している箇所にあたります。今回の調査でも前回と同様な古墳時代後期の竪穴住居跡、鎌倉時代の池跡・掘立柱建物・柵列・溝・土坑などを検出しました。

そのなかで注目される遺構として鎌倉時代の池跡(池232)があります。池跡は太秦東映映画村の北側、城北街道の西側で見つかりました。検出できた池の大きさは池の汀で測ると幅が約17m、池の深さ0.4m程です。汀には拳大の川原石と瓦の破片を敷き詰め、洲浜を形成しています。瓦は平安時代後期から鎌倉時代に作られたものです。洲浜の石は近隣でとれるチャートを主体とし、磨耗度の少ない角ばったもので近くの川(御室川など)から調達したものでしょう。東岸には洲浜の内側にチャート製の景石を1つ据えています。景石は長軸を洲浜に平行になるようにしています。大きさは長軸1.3m、短軸0.7m、高さ0.6mです。西側は地山層が高くなっていますが、その肩部にもチャートの景石を据えています。

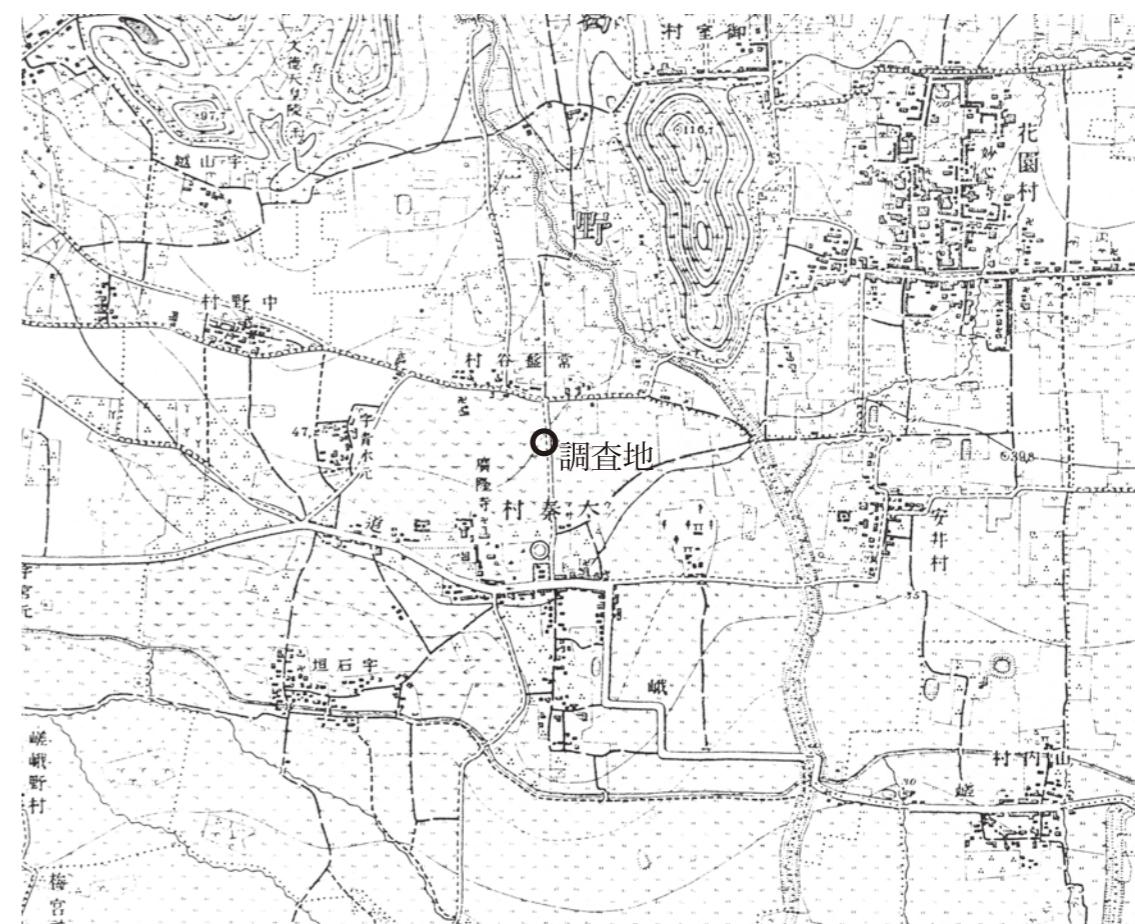
まとめ

今回見つかった池跡は平安京内で検出される寝殿造系庭園との共通点があります。洲浜の形状、景石の据え方、池の深さなどです。狭い範囲での調査ですから池の一部だけですが、この池にはもっと多くの景石と、北側には遣水や滝組なども予想されます。また1977年・2006年・今回の調査と合わせて、鎌倉時代の瓦がまとまって出土しています。明確な建物跡が見つかったわけではありませんが、近くに寺院や御堂が想定されます。池跡の様子からみると寺院ではなく池と御堂を伴った貴族の別業があったと考えています

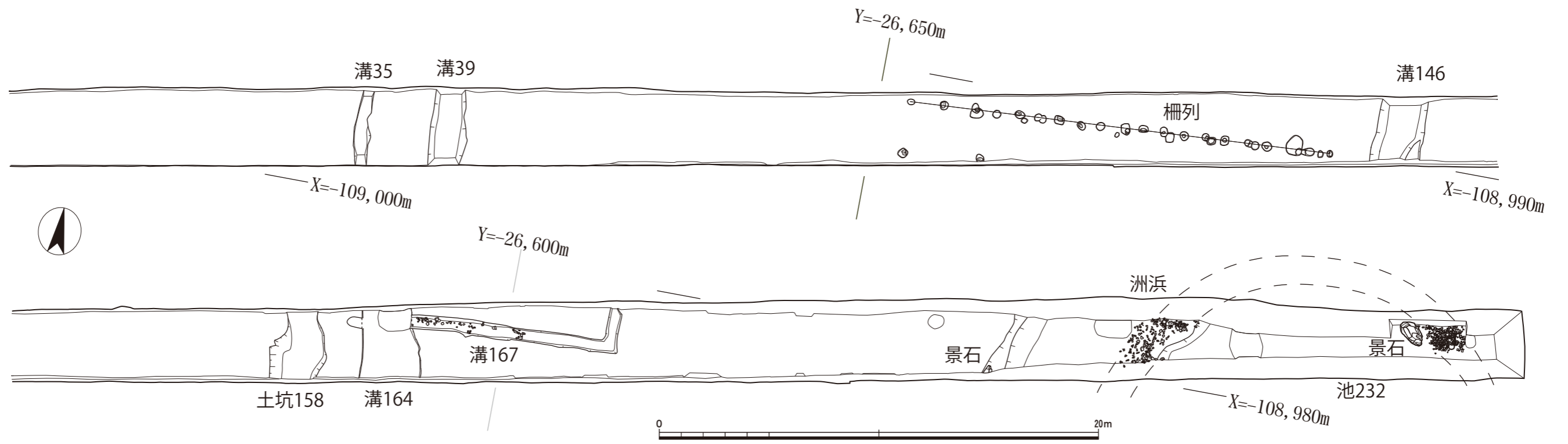
区画溝と想定される南北方向の3本の溝を検出しています。西側の2本の溝(溝35・39)から東側に多くのピットが検出できることから、この2本の溝を西の境界とすると城北街道までの距離は約120mあります。邸宅の範囲は東が城北街道、北は嵯峨道、西は南北方向の溝で、南は不明ですが、120m四方と想定されます。



調査位置図(1:2,500)



参謀本部仮製二万分一地形図「京都」明治22年測量(1:20,000)



4-2区 平面図(1:200)



溝146と柵列(東から)



溝164(北から)



池232(東から)